改定版 2022/7/25

曹洞宗総合研究センター　シンポジウム

曹洞宗と国粋主義・日本主義の系譜

― 人物とその思想 ―

曹洞宗総合研究センター　近現代教団研究部門

2022（令和 4）年 7 月 28 日

曹洞宗檀信徒会館　3 階

シンポジウム　趣旨

先人の足跡を尋ね　歩むべき道を模索する

日本の近代国家誕生は、政治・社会体制のみならず、経済や文化とりわけ封建体制下で惰眠を貪ってきた宗教も、新たな国家体制の中で、再編成や再定義をおこなうことを余儀なくされた。

曹洞宗とその寺院・僧侶も、明治初期から吹き荒れた神仏分離令とそれが誘発した廃仏毀釈運動の渦中、対外意識をもとに、日本や教団についての自覚を立ち上げるべく、さまざまな模索が試みられた。

日本には長い間伝統宗教として定着してきた仏教ではあるが、元来外来の宗教である仏教とその文化を、新たな時代環境の中で、いかに評価して再定義するかは、ある意味では、その宗教や宗派教団の存在意義を試されることも意味していた。

近代に勃興したさまざまな国粋主義とりわけ日本主義や皇道主義などと積極的に結びつき、それを根拠にして、自らの信仰を正当化し発展させようとした僧侶や周辺の知識人が多数活動した。

また、一種偏狭で排他的な国粋主義や日本主義を批判的に見ていた学識者も、わずかでありながら存在した。

このような、先人たちの日本主義への多様な関係性の一端を概観しながら、現代の曹洞宗が歩むべき道を模索していきたい。

基調講演者　略歴紹介

石井　公成　いしい　こうせい　先生

１９５０年東京立川市生まれ
早稲田大学卒業　同大学院修了　文学博士（早稲田大学 1994 年）
駒澤大学仏教学部教授　を経て　現在　駒澤大学名誉教授
専攻はアジア諸国の仏教とその周辺文化

主な著書に『華厳思想の研究』（春秋社 1996 年）、『東アジア仏教史』（岩波新書 2019 年）などがあり、石井公成監修、近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』（法藏館、2020 年）では「総論　日本主義と仏教」を担当。

日程とパネリスト

日　程　**2022 年 7 月 28 日**　木曜日

13:25～13:30　**事前連絡と確認**

会場での留意事項　（変更事項説明・休憩時間・携帯電話扱い）

配布資料確認

13:30～13:45　**開会のあいさつ**　シンポジウム趣旨説明　講師紹介

曹洞宗総合研究センター所長　志部　憲一

13:45～15:15　**基調講演**　石井　公成　先生　**遠隔通信にて講演**

近代の仏教と日本主義

―道元を国家主義に利用した人たちに注意して－

15:15～15:30　基調講演に関する質疑応答　会場および遠隔通信

15:30～15:40　休憩時間　研究報告準備

15:40～16:00　**研究報告**　近現代教団研究部門　**対面報告**

言論人としての衛藤即応

―日本精神運動批判と出陣学徒壮行辞を中心に―

16:00～16:20　研究報告に関する質疑応答　会場および遠隔通信

シンポジウムまとめ

16:20～16:30　**全体のまとめ　閉会のあいさつ**

曹洞宗総合研究センター所長　志部　憲一

16:30　**終了**　解散

シンポジウム　パネリスト

基調講演者	石井公成先生　駒澤大学名誉教授
研究報告者	近現代教団研究部門　嘱託員（研究者）
シンポジウム司会	宮地清彦　常任研究員

※おことわり

基調講演は石井先生ご自宅からの遠隔通信参加を基本としますが　当日の諸事情によって変更する場合もあります

基調講演　要項　　石井　公成　先生

近代の仏教と日本主義

―道元を国家主義に利用した人たちに注意して－

自国の自然や文化を誇ることは、どこの国にも見られる。それが他国に対する蔑視や非難と結びついた攻撃的な国家主義も、しばしば見られるものだ。その特殊な形態である日本主義は、欧米諸国の影響とそれに対する反発が強まった明治期に、世界無比と誇る「国体」の概念に基づいて生まれた。

日本主義の初期の代表の 1 人である井上円了（1858-1919）は、真宗の寺の出身であって仏教を重視していたが、高山樗牛（1871-1902）や木村鷹太郎（1870-1931）などの論客は、仏教などは厭世的で国家に役立たないものだと批判した。幕末・明治初期の廃仏毀釈で痛めつけられ、またキリスト教の進出を恐れていた仏教界、特にもともと護国を立場としていた天台宗・真言宗と違い、鎌倉時代に誕生して国家から弾圧を受けた諸宗と、その宗派の教学を尊重する知識人たちは、仏教は国家に役立つ宗教であることを証明する必要もあって、次第に日本主義的な仏教を説くようになった。

先陣を切ったのは、日蓮宗から飛び出して在家教団を組織し、自らの立場を「日蓮主義」と称し、国体顕彰に努めた田中智学（1861-1939）だ。その同級生である清水梁山（1864-1928）などは、天皇本尊論を説くまでに至っている。梁山は、大正 5 年から大正 15 年まで駒澤大学で必修科目であった「日蓮宗講座」を担当しており、その講義は人気が高く、学生だけでなく学長や教授なども聴講したという。晩年の梁山は他の講義は断り、駒沢に居住して駒大での講義に力を入れていた。

曹洞宗は、日清戦争・日露戦争をきっかけとして国家主義を強めていった。ただ、道元の思想そのものを国家主義的な立場で解釈し始めたのは、親鸞と聖徳太子を尊崇して「南無日本」と唱え、国家の敵と思われた人々を激しく攻撃した原理日本社の同人、木村卯之（1879-1934）などが早い。

その卯之の道元論を高く評価したのが、東大医学部教授だった生理学者の橋田邦彦（1882-1945）だ。若くして陽明学に親しみ、ドイツ留学の後、生命の問題に悩むようになった橋田は『正法眼蔵』に出逢って感激し、『正法眼蔵』に関する多くのすぐれた研究を発表するようになり、駒澤大学でも 2 度招かれて講演している。橋田は、「教育勅語」を指針として実践と学問の日本的な統合を模索するとともに、学生教育に対する関心を深め、第一高等学校校長となった。さらに文部大臣となり、戦局が悪化して勤労動員がおこなわれるようになると、「知行合一」の陽明学と「修証は是れ一等」「身心一如」などと説く道元の思想を結びつけ、「行学一体」を説くようになった。東大の哲学科を出て、朝鮮の農学校に勤務していた佐藤得二は（1899-1970）は、道元を評価した『仏教の日本的展開』が評判になった結果、橋田に招かれて一高教授兼生徒主事となり、昭和 15 年に『道元と現代学生』を出した翌年、文部省督学官に任命され、勤労動員の学徒を慰問・激励して全国を回っている。この前後の文部省では「行学一体」「学行一如」「行学一如」などの語が用いられていた。駒大の建学の理念として語られることもある「行学一如」の語は、駒大の仏教研究者たちが総力をあげて編纂した『禅学大辞典』にも載っておらず、典拠は不明なままだ。駒大において「行学一如」の語が用いられた初例は、その昭和 15 年に文部省の指導に基づいて結成された「駒澤大学報国団」の「団則」であり、『駒澤大学新聞』第 54 号（12 月 20 日）1 面によれば、「行学本部は行学一如の理想のもとに修禅弁道法式作法伝道教化其の他国民生活に須用なる芸能を修練せしめ以て皇国民としての高邁雄深なる指導者を練成す」と記されている。報国団の事務責任者は、戦後に学長となって「行学一如」を強調した保坂玉泉教授だった。

社会に影響を与えたのは、橋田を教育界に迎え入れた国家主義文部官僚の伊東延吉（1891-1944）が創設して初代所長を務めた国民精神文化研究所の中心となり、『国体の本義』の編纂にも関わったヘーゲル哲学者の紀平正美（1874-1949）が、昭和 13 年に刊行した『道元と日本の禅』（日本文化協会出版部）だ。本書は昭和 18 年に文部省教学局の「日本精神叢書」として再刊されて広く読まれた。

この時期には、日本精神論を批判していた衛藤即応（1888-1958）までも含めて、曹洞宗および駒澤大学の教員の多くは、盛んに軍国主義的な主張をして戦争をあおっていたが、道元禅師は「興禅護国」を説いたなどの点を強調する程度で、日蓮系や真宗系のように伝統教学をねじまげた教学体系を作る試みはあまりなされず、知識人よる国家主義的な道元論が目立つ。これは、近代的な道元再評価が宗門内から生まれず、哲学者である和辻哲郎の『沙門道元』で始まったことと平行している。

なお、戦時中に軍国主義的な発言をしていた者たちの多くは、戦後は一転して民主主義を礼賛するようになった。これについては市川白弦（1902-1986）が、戦時中は「随所に主となる」という言葉を盛んに用いて軍国主義的な言論をしていた臨済宗の老師たちのことを、実際には時代に流されていただけであって、「随所に従となる」ものだと評した批判があてはまるだろう。

講演にあたっては、以下の点についても時間が許す限り触れてみたい。

1. 釈雲照の仏教国教論
2. 「軍人勅諭」を巻頭に置いた森田悟由『軍人禅話』
3. 軍隊の行動規範と僧堂の規矩
4. 『正法眼蔵』や『伝光録』等を漢訳した曹洞宗大学林総監心得、陸鉞巖の皇室尊崇
5. 陸鉞巖の弟子、井上秀天の近代的な禅研究と仏教平和論
6. 加藤咄堂の戦争論
7. 原田祖岳・安谷白雲の軍国主義的言論
8. 中根環堂の戦前と戦後の言論
9. 日本神話と結びつけた今成覚禅の道元論
10. 安岡正篤の金鶏学院で道元を講じた日本精神主義者の村上素道
11. 戦争を意義づけた林屋友次郎の『仏教の戦争観』
12. 日米開戦の日に出された曹洞宗管長告諭に始まる戦時中の管長教示
13. 戦時中の坐禅の強調
14. 人民戦線運動の共感者から国家主義に転向した田中忠雄の道元論と言論活動
15. 増永霊鳳の戦時中と戦後の言動

【参考文献】

勅語下賜記念事業部編『学徒出陣記念　日本主義死生観－附　靖国の哲学』（人生道場、1944 年）

市川白弦『日本ファシズム下の仏教』（エスエス出版会、1975 年）

中濃教篤編『戦時下の仏教』（国書刊行会、1977 年）

ブライアン・ビクトリア『禅と戦争－禅仏教は戦争に協力したか－』（光人社、2001 年）

石井公成「（書評）ブライアン・ビクトリア著『禅と戦争－禅仏教は戦争に協力したか－』（『駒澤短期大学佛教論集』第 7 号、2001 年 10 月　インターネット上で pdf により公開）

同「『行学一如』の歴史的背景　―橋田邦彦の主張を中心にして―」（『印度学仏教学研究』55 巻 1 号 2006 年 12 月　インターネット上で pdf により公開）

吉田時夫『曹洞宗と戦争責任を考える』（文芸社、2014 年）

石井公成監修、近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』（法藏館、2020 年）

研究報告　要項　　近現代教団研究部門　嘱託員

言論人としての衛藤即応

―日本精神運動批判と出陣学徒壮行辞を中心に―

【研究報告　要旨梗概】

日本の近代社会思想の一翼に、国粋主義、忠君愛国主義のちの日本主義などの国家主義的な思潮が存在した。第二次世界大戦の非常時には、さらに尊皇主義や皇道主義として先鋭化し、日本伝統仏教教団と僧侶たちは、ほぼ例外なく、この思潮に同調するのみならず積極的に宣伝鼓吹していた。

このような国粋主義全盛の社会環境の中で、それに疑義を呈し、批判的な論陣を張る僧侶や仏教学者はほぼ皆無といってよいだろう。しかしながら、かかる状況下、積極的に国粋主義的な思潮に呼応しそれに同化することをせずに、あえてその潮流にサボタージュする言論人が存在した。その一人に衛藤即応師をあげ、彼の言論の現代的意義を検証する。

1　はじめに　石井先生基調講演への感謝　発題説明

大内青巒　1845-1918　曹洞教会修証義　原型の起草者 ⇒ **尊皇奉仏大同団**
澤木興道　1880-1965　澤木禪　宿なし興道　⇒　**念彼天皇力　念彼軍旗力**
衛藤即応をとりあげることへの忠告

2　言論人としての衛藤即応

① **宗教者**として　　曹洞宗僧侶　寺院住職
② **宗学者**として　　近代宗学の創始者　『正法眼蔵』校訂者
③ **仏教学者**として　　八宗兼学の仏教学者　駒澤大学教授・学長
④ **教育者**として　　京都紫竹林学堂（安泰寺）　東京道憲寮にて宗侶・学徒育成
⑤ **言論人**として　　反宗教運動　日本精神運動への応答・批判

3　反宗教運動への応答

①**反宗教運動**とは？

1931 年～1934 年　おもに反宗教闘争同盟準備会（共産党系）と日本反宗教同盟（社会民主系）によるマルクス＝レーニン主義による宗教否定運動。宗教＝阿片論に依拠し、現実の宗教が支配階級による抑圧と支配の正当化に奉仕していると指弾し、大衆をその

宗教的観念から解放しようとする社会運動。曹洞宗を含む当時の仏教界にも深刻な脅威と影響を及ぼしたが、官憲の中心メンバー検挙により 1934 年には壊滅状態となる。

⇒参考　：　『宗報』にみる戦争と平和　第 5 章　pp.59-63

②反宗教運動の歓迎・批判

仏教の甦生のため、反宗教運動を内心歓迎している（趣意）

⇒別紙資料「神社崇拝と佛教」再録版　pp.159-160

4　日本精神運動批判

①日本精神運動とは？

「日本精神」の用語は、1931（昭和 6）年の満洲事変を契機に当時の日本社会において多用されることになった国粋主義的、国家主義的な標語。「日本精神」の類語としては、幕末期の「尊皇攘夷」や、日露戦争期の「大和魂」「忠君愛国」等を先駆とし、以後は、軍国主義的な政治スローガンに影響を及ぼす。日本精神運動は日本軍の満洲侵略に対する国際的な非難と日本孤立という「非常時」下において、当時の言論界や宗教界をも巻き込んだ流行思潮となった。(『国史大辞典』参照)

②日本精神運動批判とその後

「日本精神」自体は否定しないが、廃仏志向や国粋主義的・排外的思潮は批判

その限界と思想の変調と挫折？

⇒『宗報』にみる戦争と平和　第 5 章　pp.63-68

5　出陣学徒壮行辞の密意

① 駒沢大学学長就任演説「駒沢大学の教育理念について」1953 年 6 月

② 日章旗寄書

③ ふたつのテキスト　戦中速記版　戦後草稿版

④ 生き抜く覚悟

⑤ 坐禅箴引用の密意

⑥ 危険な言論への同時代人（出陣学徒）の印象・評価

⇒別紙資料「ある宗学者の弁解と不服従」　宗教研究 Vol.95

別紙資料「衛藤即応『出陣学徒壮行の辞』再読」 学術大会紀要 Vol.23

6　まとめ　その言論の現代的意義

第一　戦前・戦中期における言論人としての態度を再評価する

第二　戦前・戦中期の左右両派からの論難や抑圧に誠実に向き合う

第三　言論の自由度は予想以上に高い

第四　相手の主義主張に沿うようにしながら　それを突き抜ける論法

第五　衛藤の周辺の言論から衛藤仏教学　衛藤宗学の再考の必要性